

★ 特別企画：潤いある空間と緑化のあり方 ★

インタビュー

敷地内緑地確保の仕組みも変わり、 新たな緑の価値が生まれる

(株)グリーバル 技術顧問 石黒 一弘 氏に聞く

商業施設や店舗、建物のロビーやエントランスなど、人々の集まる空間には緑が採用されている。一方でウェルビーイングなど、人が生活する空間においても緑による癒しが求められるようになりつつある。建築緑化の現状について(株)日比谷花壇のグループ会社で、建築緑化の施工から維持管理を手掛ける(株)グリーバル技術顧問の石黒一弘氏に緑化の現状と課題、今後の展望について話を聞いた。(編集部)

緑の価値が変わりつつある

——現在の建築緑化の現状について教えてください

すこし前まではバイオフィリックデザインと唱えられていましたが、最近、盛んに言われているのがウェルビーイングです。緑が身体体や健康に与える影響として非常に良い効果があることから人々の暮らしの周りに緑の量が増えてきています。

特にコロナ禍において人々が最も集まった場所が公園でした。自由に移動や出歩くことも出来ず、学校や会社にもいけない。そうした時期でも公園という空間はパブリックでありながらパーソナルスペースを保つことができる空間と認識されました。国営昭和記念公園で行われた実証実験でも、快適に過ごせる空間やワークスペースとして緑のある場所が好ましいという報告があげられています。

こうした状況からも人々が集う空間には緑が大切だという認識は高まっており、デベロッパーの開発事業でも重要なファクターとして設計段階から建物内外に緑をしっかりと取り入れようという動きが出てきています。また、CASBEE ウェルネスオフィス、LEED などの認証制度においても緑化の重要性は高まっています。



▲「コスト以上のパフォーマンスがあると、多くの企業が緑を求めるようになりました」と話す石黒さん

【プロフィール】

石黒 一弘(いしぐろ・かずひろ)
株式会社グリーバル 技術顧問

【経歴】

1958年 埼玉県生まれ。
1982年 宇都宮大学農学部卒業、
同年 日比谷花壇造園土木(現日比谷アメニス)入社。
1999年 インテリアスケープ入社(現 グリーバル)、現在に至る。
2014年 屋内緑化推進協議会理事

植物園、商業施設、オフィスなどの室内緑化の設計・施工、メンテナンスまでを一貫して数多く手がけ、海外からの植物輸入などにも携わる。現在、福島イノベーションコースト構想の次世代人材育成の為、福島県内の複数の農業高校で室内緑化の特別授業を行う。

——都市や建物の環境負荷軽減で多肉植物による屋上緑化もありますが

法的な緑化面積の確保や遮熱効果が得られるため屋上緑化には補助金や建蔽率緩和などの制度を出しながら積極的に進めている自治体もあります。この時期に多くのメーカーがセダムなどの多肉植物は手間がかからないという謳い文句で参入してきました。ところが、売りのノーメンテでは別の種類の植物が生えたり、ここ数年の夏場の高温時期の長期化で乾燥に強い多肉植物といえども薄層土壌では枯れるケースが目立ち始めてきました。それまで参入した